

# 琥珀い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

特集

高校魅力化による地域と人づくり



116

2026 September

「島まるごと学校」の実現を目指す

2022年度に新学習指導要領がスタートし、「社会に開かれた教育課程」が求められる中、全国の高校では「探究の学び」が実践されるようになった。島根県立隠岐島前高等学校では、15年前からその先駆けともいえる課題発見・解決型の教育を、「高校魅力化」の取り組みとして実践してきた。かつては一部の小規模校や定員割れした学校の取り組みのように捉えられていた高校魅力化だったが、新学習指導要領の理念に位置付けられたことで、全国の高校においても取り組むべきものとして認識されるようになってきた。

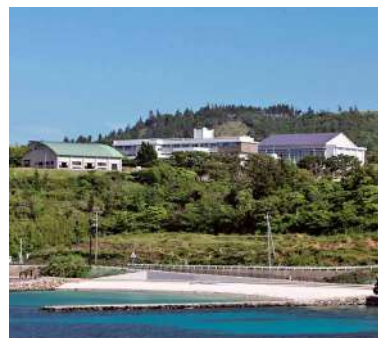
私は現在、一般財団法人地域・教育

魅力化プラットフォームで全国の高校魅力化推進に取り組んでいる。その原点は、2006（平成18）年に日本海の離島である隠岐諸島の島根県海士町に出前授業の講師として招かれたことにある。人口減少・少子高齢化・財政難といった社会課題が身近にあるという地域の状況が、私には魅力に感じられた。移住を決め、翌年から、町の教育や隠岐島前高校の存続問題に関わるようになった。

隠岐島前高校は、隠岐諸島の島前地域の西ノ島町、海士町、知夫村から通学できる唯一の高校として、島前地域の最高学府の役割を担っていた。だが、人口減少と少子化に伴って2003年度に145人であった生徒数は2008年度には89人にまで落ち

込んだ。高校の存続に危機感を募らせたこの地域では、隠岐島前高校の校長や3町村の首長・教育長・議長らで構成する「隠岐島前高校魅力化の会」を設置し、さらにその組織の下に、教員や役場職員、地域の有志らによるワーキングチームを設けた。生徒や地域住民の声を集めながら隠岐島前高校の魅力と課題について議論を続ける中で高校魅力化に向けた構想を策定し、「島まるごと学校」を掲げて実現に向けた取り組みを始動した。

まずは島前地域を舞台に、ヒト・モノ・コトの地域資源を教材とした学びの展開を打ち出し、そこから課題を発見して解決に挑戦するプロジェクト型の学習を進めていこうと考えた。また、小規模校であることを逆手に取り、き



「島まるごと学校」を掲げて高校魅力化に取り組んだ島根県立隠岐島前高等学校  
写真提供／一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム



## POINT OF VIEW 視点

# 高校魅力化で 持続可能な地域の未来をつくる

## 岩本悠 一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事

### profile

岩本 悠  
（いわもと・ゆう）  
東京都生まれ。学生時代にアジア・アフリカ20カ国の地域開発の現場を巡り、体験学習記『流学日記』（文芸社、2003年）

を出版。その印税等でアフガニスタンに学校を建設。幼稚園から高校までの教員免許を取得し、卒業後はソニー株式会社（当時）で人材育成・組織開発・社会貢献事業等に従事。2007年から隠岐島前高校魅力化プロジェクトに携わり、2015年より島根県教育魅力化特命官として教育と人づくりを推進。2017年に一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームを設立。文部科学省中央教育審議会委員等を務める。2016年第1回特別ソーシャルイノベーター最優秀賞（日本財団）など受賞多数。



### 特集

## 高校魅力化による地域と人づくり



p.6



p.12



p.14



p.20



p.23



p.24



p.26

# 碧い風

きらめきの地域デザイン

あおいかぜ

116

2026 September

## CONTENTS

- |    |                                                            |
|----|------------------------------------------------------------|
| 28 | 山をあるく 27 鷲峰山（鳥取県）                                          |
| 26 | オンリーワンのご当地ミュージアム 9 柵原ふれあい鉱山公園柵原鉱山資料館（岡山県美咲町）               |
| 24 | 伝統芸能を継ぐ人ひと 17 隠岐の田楽と庭の舞（島根県西ノ島町）                           |
| 23 | この名酒にこの一品 39 生飴仕込 富鈴 長芋のくず豆腐揚げ（鳥取県北栄町）                     |
| 20 | 夢紡人／ゆめつむぎひと 112 島根フィルティース 球団代表 大久保 一則（島根県川本町）              |
| 17 | キラリ、輝く元気企業 89 あさひ製菓株式会社（山口県柳井市）                            |
| 14 | 地域に生きる企業家群像 116 株式会社キヤステム 代表取締役社長 戸田 拓夫（広島県福山市）            |
| 9  | 島で学ぶー存続危機にあった高校が地域の拠点へ<br>広島県立大崎海星高等学校（広島県大崎上島町）           |
| 6  | 附属校化で県立大との連携を強化し、グローバルな人材を育成<br>山口県立大学附属周防大島高等学校（山口県周防大島町） |
| 3  | 地域資源を学びに変えて地域と進める高校の魅力化<br>鳥取県立日野高等学校（鳥取県日野町）              |

表紙写真／島根半島・野波地区の透き通るような海に浮かぶ小舟（島根県松江市）  
表紙写真提供／岡本 良治  
目次写真提供／山口県立大学附属周防大島高等学校、鳥取県立日野高等学校、西江 浩二、島根フィルティース運営事務局、齋藤 愛、一般社団法人西ノ島町観光協会、黒部 麻子  
デザイン／有限会社シフト

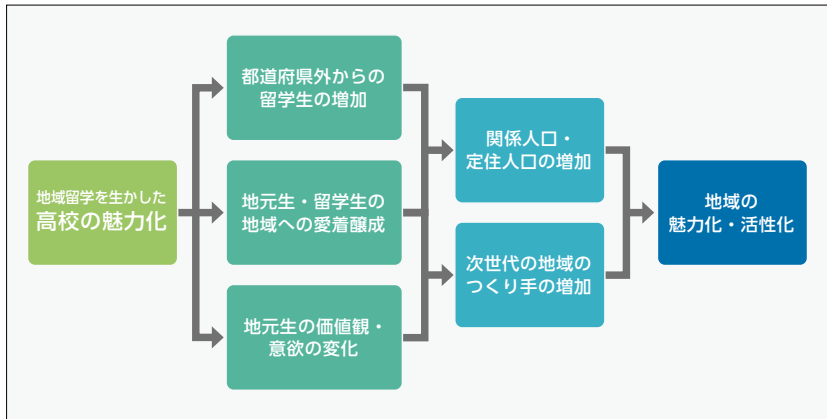
\*本誌は再生紙を使用しています

### 特集

## 高校魅力化による地域と人づくり

- |    |                                                                 |
|----|-----------------------------------------------------------------|
| 3  | ー視点ー<br>高校魅力化で持続可能な地域の未来をつくる<br>岩本悠（一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム代表理事） |
| 6  | 附属校化で県立大との連携を強化し、グローバルな人材を育成<br>山口県立大学附属周防大島高等学校（山口県周防大島町）      |
| 9  | 島で学ぶー存続危機にあった高校が地域の拠点へ<br>広島県立大崎海星高等学校（広島県大崎上島町）                |
| 12 | 地域資源を学びに変えて地域と進める高校の魅力化<br>鳥取県立日野高等学校（鳥取県日野町）                   |

図3 高校魅力化によって地域に生まれる変化

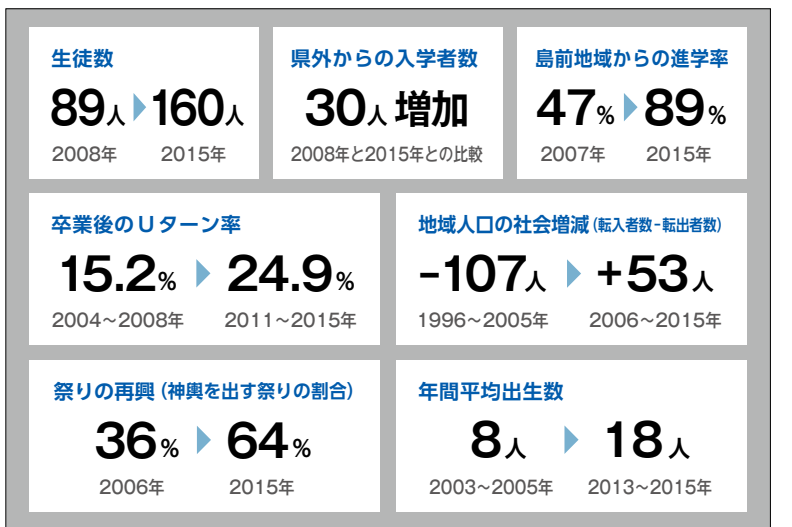


出典：一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム提供資料を基に編集部で作成



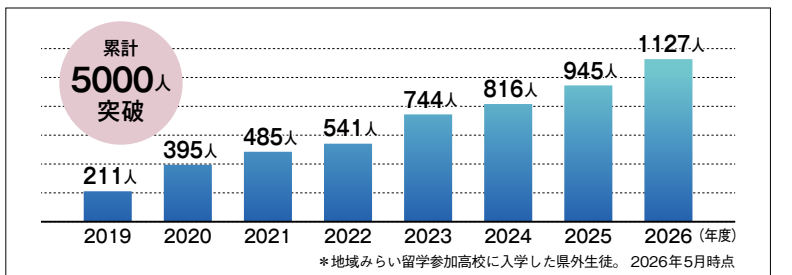
全国190校が参画するようになった「地域みらい留学」。留学校のブースが集まる「日本まるごと高校フェス」も毎年開かれている  
写真提供／一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォーム

図1 岩本氏が高校魅力化に取り組んだ時期の隠岐島前高校と地域の変化



出典：地域みらい留学Webサイト自治体向けページ（<https://c-platform.or.jp/jititai.html>）を基に編集部で作成

図2 全国における地域みらい留学生\*の推移 (1年生の入学者数)



\*地域みらい留学参加高校に入学した県外生徒。2026年5月時点  
出典：地域みらい留学Webサイト自治体向けページ（<https://c-platform.or.jp/jititai.html>）を基に編集部で作成

その課題に向き合い、解決しながら暮らしていかなければならない環境だからこそ、子どもたちの能力や才能を伸ばし人間力を磨くには格好の学びの場になるのだとアピールした。

## 全国へ広がる 高校魅力化と留学制度

こうした募集活動の結果、島留学科年度には、全国から7人の島留学生が1年生として入学し、翌年以降もその数は増加した。島外、特に東京など都市部からやって来た生徒は、生活文化が大きく異なる島前地域を舞台にした学びに興味を持って取り組んだ。その姿は地元の生徒たちにとっても大きな刺激となり、外からの目を通して自分たちの地域を見る目が変わっていった。

こうした相乗効果もあって地元・島前地域からの進学率も高まり、隠岐島前高校は高校魅力化の取り組み開始から約10年間で生徒数が倍増するという結果を生んでいる（図1）。

この取り組みを「あの島であの学校だからこそできた特別な成功例」として終わらせてはならないと考え、島外地域へと広げるべく島根県と連携し、2012（平成24）年には、県内の他の公立高校への留学生を全国募集する

## 高校と地域の両者をつなぐ コーディネーターの重要性

では、どのように高校と地域が連携し、高校魅力化を進めていけばいいのか。高校魅力化の取り組みの動機や目的が、学校など教育側と自治体など地域側で異なると、連携や協働の考え方や価値観も異なり、意見や方向性がなかなか一致しないことも少なくない。高校教育は入学から卒業までの3年間にわたるため、一部の指導者に依存した活動では、中心となる人材が異動などにより短期間で入れ替わった際に活動の継続が難しくなる。

そのため、学校と地域をつなぐコーディネーター（調整役）の存在が有効となる。コーディネーターが核となって、高校と地域が子どもたちにどのような教育を行いたいかを一緒に検討し、生徒や地域住民の声にも耳を傾けながら、共通の目標やビジョンをつくっていく場や体制づくりが不可欠なのである。

コーディネーターの養成に取り組んでいる大学もあり、例えば島根大学では社会教育主事講習として地域教育魅力化コーディネーター育成コースを設けている。私たちの団体でも、コーディネーターの育成や研修を進めている。

「しまね留学」をスタートさせた。

その後、全国の高校や自治体から多くの依頼や問い合わせを受けるようになり、「うちでも取り入れたい」という声が上がった。そこで全国の高校魅力化を支援し、日本全体の高校や地域の教育を変えていく活動を進めようと、2017年に一般財団法人地域・教育魅力化プラットフォームを設立。島前地域で進めてきた高校魅力化と島留学のノウハウや知見、経験を生かし、都道府県を通じて全国の高校や市町村の高校魅力化への取り組みを支援している。そのメインとなる活動が、2018年度から開始した「地域みらい留学」である。全国の離島や中山間地域の自治体や高校に呼びかけ、高校魅力化に取り組むとともに全国から生徒を募集する活動を展開、現在までに全国から190校が参画し、留学生の累計は5000人を超えている（図2）。

## 高校での学びが次世代を育む

近年、全国的に高校魅力化が取り組まれるようになった背景には、島前地域同様に少子化の進行がある。入学する生徒が減少すれば高校の存続が難しくなり、高校がなくなればさらに若年

## 地域側も当事者意識を持ち 高校と共に汗をかく

高校魅力化を進める上で最も大切なことは、自治体など地域側も当事者意識を持つことである。「高校の取り組みなので高校が行えばいい」「県立高校なので県がきちんと行うべき」などと、学校や教育委員会に任せているようでは、成果は期待できないだろう。地域においても、関係者が自分事として捉え、高校と共に魅力化に向けて汗をかくことが何より大事である。

人口減少や少子高齢化が全国より30年分ほど進んでいた島前地域で起こっていることは「未来の箱庭」、つまりこれからの社会の縮図であり、将来的には全国どこでも起こり得る問題である。隠岐島前高校で高校魅力化に取り組んでいた当時から感じていた。だからこそ、これらの課題に取り組む島前地域で解決に向かう事例を先取りして示し、それを一つの希望にして全国の教育や地域づくりに貢献したいと考えていた。高校魅力化の動きが全国的に認知されるようになった今、その取り組みをさらに加速させ、持続可能な未来づくりを進めたいとの思いを強めている。



1 「島・学・人プロジェクト」の一環としてランニングイベント「ウルトラマラニック」でボランティア活動を行う生徒たち。法被には「島がすき 学校がすき そこまで生きてる人がすき」というコンセプトが記されている  
2 コミュニティ・スクールの提案で行われた地域住民による入寮歓迎会



探究学習(PBL)の一例：ニホンアワサンゴの研究  
世界最大級の群生地を誇る、周防大島のニホンアワサンゴ。校内で飼育・観察を行うほか、近隣小学校の見学受け入れや海岸清掃などの保全活動にも取り組む

- ※1 ユネスコスクール…  
1953年に発足した国際的なネットワーク。加盟校同士で情報交換を行いながら地球規模の諸問題に対処する教育内容や手法の開発、発展を目指す
- ※2 コミュニティ・スクール…  
学校の教育方針や課題を学校・家庭・地域が共有し一体となり子どもたちを育てる学校運営協議会制度
- ※3 PBL…  
課題解決型学習。Problem-Based Learning (問題解決学習) と Project-Based Learning (プロジェクト型学習) の2つを指す

**全国初の  
地域創生科を設置**  
2014 (平成26) 年からは生徒の  
全国募集を開始するとともに、高校と

現在、同校は定員割れの状況を脱し  
志願者数も増加に転じているが、それ  
は、山口県立大学の附属校となったこ  
とだけが理由ではない。  
「人口減少や少子高齢化を受け、地域  
の子どもを地域が育てる」を目標に、  
島内二つの中学校と連携型中高一貫教  
育を25年前から行っており、私自身も  
出前授業に行きます。地域との関わり  
を重視した取り組みを積み重ねてきま  
した」と竹村和之校長は話す。

地域が一体となって島を盛り上げるべ  
く、島全体を学習の場とする「島じゅ  
うキャンパス」をスローガンに全国  
初の「地域創生科」を設置した。以来、  
「島・学・人プロジェクト」として地域  
資源を生かした体験学習や課題解決型  
の探究学習を行っている。  
それらの活動は、同年9月の県内公  
立高校で初のユネスコスクール<sup>※1</sup>への加  
盟認証や、翌年のキャリア教育優良学  
校文部科学大臣表彰の受賞などにつな  
がった。さらに2016 (平成28) 年  
には、こちらも県内公立高校では初め  
てコミュニティ・スクール<sup>※2</sup>を導入する  
など、地域と融合した先駆的な取り組  
みを重ねてきた。

**年間の探究学習で  
課題解決力を養成**  
今年度スタートした普通科 (定員90

2020 (令和2) 年の「地域みら  
い留学」への参画を機に教育内容がよ  
り広く知れ渡ることとなり、県外から  
の入学者数の増加にもつながった。  
2026年4月現在、在校生215  
人のうち、通学者は周防大島町内から  
が63人、柳井市、岩国市など町外から  
も同じく63人である。残る89人は遠方  
や県外からやって来た生徒で三つの学  
生寮を利用しており、通学費や寮費の  
一部については自治体の補助金を受け  
られることも魅力の一つとなっている。

人) のカリキュラムには、福祉・ビジ  
ネス・情報・スポーツ・自然科学など  
多彩な分野の選択科目が60以上あり、  
「大学進学コース」「キャリアコース」  
に分かれる2年次以降、希望進路に応  
じて選択できる。  
これまで力を入れてきた探究学習  
は、家庭や社会福祉の基礎、社会課題  
について教科横断的に学ぶ「総合的な  
探究の時間」として、「QOL (生活  
の質) の向上」「Wellbeing (地域幸福  
度) の実現」につながる学びを重視し  
ており、3年間で計6単位と、他校の  
約2倍のボリュームだ。3年間を通し  
た探究学習は、今年から「PBL<sup>※3</sup>」と  
名付けられた。まず1年次に自治体職  
員や島内の起業家など専門家の講演を  
聴いて地域に関する探究テーマを見つ  
け (Program)、2年次ではそのテー  
マに沿った企画・運営をグループで進  
める (Project)。さらに、3年次に課  
題解決に向けた個人探究や成果発表を  
行って地域創生への貢献力を育むので  
ある (Problem)。  
同校はこれまで、地元産の塩と、県  
内産のはちみつや梨などを組み合わ  
せた塩あめを地元製塩会社と共に開発  
した「夢塩プロジェクト」や、島が誇  
る世界最大級の群生地を守る「ニホン



有志の生徒による「アロハ・フラ島高」。島の恒例行事「サタフラ」に毎年参加するほか、地域の福祉施設で利用者との交流活動なども行う

## 附属校化で県立大との連携を強化し、 グローバルな人材を育成

山口県立大学附属周防大島高等学校《山口県周防大島町》

2026 (令和8) 年4月、周防大島に山口県立大学附属周防大島高等学校が開校した。  
地域と連携した探究学習やハワイとの縁を生かした語学研修など  
多彩なカリキュラムを前身の高校から受け継ぐとともに、  
今年から大学附属となったことで同校はさらなる進化を遂げて島に新たな活力をもたらし、  
未来への希望を創出する。

文／村上 郁子



安下庄湾を望む高台に立つ校舎

**「高齢化の島」で  
始まった取り組み**  
山口県東部、瀬戸内海に浮かぶ周防  
大島。本州から大島大橋を渡って車で  
30分、安下庄湾<sup>あげのしやう</sup>を望む高台に立つのが、  
2026年4月に開校したばかりの山  
口県立大学附属周防大島高等学校だ。  
島唯一の高校で、3月までは「山口県  
立周防大島高等学校」であった。  
周防大島町は全国でも有数の超高齢  
化地域であり、高齢化率は55%を超  
えている。そうした少子高齢化の流れ  
を受け、2007 (平成19) 年、山口  
県立安下庄高等学校と山口県立久賀<sup>くが</sup>高  
等学校という島内二つの高校が統合さ  
れ、山口県立周防大島高等学校となっ  
た。



大崎上島に伝わる和船「權伝馬(かいでんま)」を次世代へとつなぐプロジェクト「旅する權伝馬」に参加する生徒たち

## 島で学ぶ—— 存続危機にあった高校が地域の拠点へ

広島県立大崎海星高等学校《広島県大崎上島町》

かんきつ栽培や造船業が盛んな瀬戸内海の離島・大崎上島。生徒数減少で存続の危機にあった広島県立大崎海星高等学校は、島ぐるみで高校魅力化に取り組み、地域全体を「学びの島」へと進化させることで生徒数の回復に成功した。その取り組みは、生徒の成長を促すだけでなく、住民の意識にも変化をもたらし、島に新たな活力を生んでいる。

文／川西 由香理

### 契機となった

#### 『島の仕事図鑑』制作

2014（平成26）年2月、広島県は「2017年度から2年連続で全校生徒数80人を下回る高校の統廃合を検討する」内容の方針を示した。<sup>※1</sup>これにより、広島県立大崎海星高等学校は存続の危機に直面する高校の一つとなった。当時、大崎上島唯一の高校であった同校の生徒数は定員120人に対し67人（2014年度）。島内中学生の約7割が島外へ進学しており、2017年度までの3年間で生徒数を増やすための対策を行う必要があった。高校がなくなれば地域の活力低下につながる、と危機感を募らせた町と同校は、連携して高校魅力化を軸とした再生に乗り出す。学校と地域をつなぐ民間の魅力化推進コーディネーターの力も借りながら、地域で学校を支える取り組みが動き始めた。「地域に開かれた学校にする」という方向性は定まっていたが、具体的な内容については、イベント参加や地元の中学生親子へのアンケート調査などを重ねて模索を続けた。

試行錯誤が続く中、転機となったのが、同じ2014年に町商工会が企画

アワサングの研究」など、地域活性化に取り組んできた。AIを活用した生活サポートアプリの提案では、株式会社リクルートが主催するアントレプレナーシップ（起業家精神）プログラムのビジネスプランコンテスト「高校生Ring AWARD 2024」で準グランプリを獲得した。他にも、内閣府主催の「地方創生☆政策アイデアコンテスト」の最終審査（全国大会）に過去4回で5作品が選出されるなど、探究学習において高い評価を得ている。こうしたこれまでの取り組みが、県内で活躍する人材の育成を使命とする県立大学のアドミッションポリシーに合致したことも、附属校化実現の大きな要素となった。

### 県立大附属校として 大学での学びを先取り

今年度からは、山口県立大学との連携が強化された。同大学の学校推薦型選抜枠約100人のうち最大20人程度が附属校からの進学枠となるだけでなく、連携は高校での学習内容にも及ぶ。選択科目のうち「管理栄養士基礎」「公衆衛生基礎」は同大学の栄養学科、看護学科につながる内容であり、連携によって大学生も島に来る機会が増えることで、さらなる地域活性化も期待できる。さらに、2年次に「県大進学プログラム」を選択すると、附属校枠で進学を目指すだけでなく、同大学の授業を先取り履修でき、個人探究学



3 地元の海に生息する「ニホンアワサング」と町の花「ミカン」のアロハシャツは山口県立大学の学生によるデザインだ  
4 語学研修で訪れるハワイでは現地の高校生と交流も行う  
5 シーカヤックは周防大島ならではのスポーツ活動として今後さらに力を入れる

### この島に誇りを持ち 地域の未来を担う人材に

周防大島は「瀬戸内のハワイ」と呼ばれ、ハワイへの移民の歴史を背景にカウアイ島と姉妹島縁組を結び交流を続けている。

こうした縁を生かし、夏には制服の代わりにアロハシャツを着用する「アロハビズ」を導入。2年次には山口県主催の「東部地域グローバル人材育成事業」による補助を活用し、カウアイ島で現地の高校生と交流を行う語学研修を低予算で実施するなど、この島ならではの教育を展開している。

部活動においても、「総合スポーツ部」「総合文化部」を新設した。シーカヤックやフィッシング、サイクリング、登山など季節ごとに数種類のスポーツ活動等に取り組み、多角的にこ

の島の自然や文化の魅力を伝える狙いだ。また、全ての生徒が参加でき、部活動との両立も可能な有志のフラチーム「アロハ・フラ島高」は、周防大島の夏の恒例行事「サタフラ」に毎年参加しており、2022（令和4）年以降、フラガール甲子園にも出場するなど同校の名物となっている。

「少子高齢化は、今後全国各地で直面する課題です。だからこそ、県立大学との連携には大きな意義があります。先の見えない時代を生きる生徒たちの心に地方暮らしへの肯定感を育み、地域の未来を提案し担う人材として送り出したいのです」（竹村校長）

2025（令和7）年、同校は文部科学省の推進する「DXハイスクール」<sup>※4</sup>に採択され、特色ある教育活動をさらに推進している。地域と学びの融合で、この島の未来を創生する。



校長の竹村和之先生(中央)、教頭の重村直孝先生(左)、教頭の重村励志先生(右)  
山口県立大学附属周防大島高等学校  
山口県大島郡周防大島町西安下庄489  
☎0820-77-1048  
https://suo-oshima-hsypu.jp/

※4 DXハイスクール…高等学校DX加速化推進事業。高校段階からデジタル人材育成を強化すべく、ICT活用のための環境整備を支援する事業

※1 出典：広島県教育委員会「今後の県立高等学校の在り方に係る基本計画」（平成26年2月26日）内、「取組の方向性」

※2 広島商船高等専門学校（国立）は存在する。なお、2019年には大崎上島町が誘致する形で全寮制の中高一貫校、県立広島観智学園中学校・高等学校が開校した



4 1年次のプロジェクトで先生のウェディングドレスを製作した生徒たち。3年次の大崎上島学では福祉施設で老夫婦の結婚式を開催した

5 「みりよくゆうびん局」は部活動の一環として、島の良さと学校の魅力を全国に発信する広報活動を行う



生徒がデザインした「ラッピングポスト」の除幕式が谷川正芳町長と共にわれ、大崎上島町広報誌(2025年3月号)の表紙に掲載された



高校魅力化を担当する 兼田侑也先生

広島県立大崎海星高等学校  
広島県豊田郡大崎上島町中野3989-1  
☎0846-64-3535  
https://www.osakikaisei-h.hiroshima-c.ed.jp/  
Instagram @kaiseimiryoku

同校は統廃合の危機を脱したかのように見えるが、その歩みはまだ道半ばだ。

## 広域連携で始まる新たな試み

自分のペースで進めたい生徒など、個人を尊重しながら伴走してきた。住民たちの中にも積極的に支援してくれる人が増えている。

「生徒たちに触発され、地域を盛り上げようとカレー店を開業する人が出てくるなど、住民たちの間にも新たな挑戦が生まれています」と兼田先生は語る。他にも、卒業生たちが島外から人を呼び込む「島体験イベント」などを企画することもあるという。このように学校の活性化は、地域住民の挑戦を後押しし、人の輪を広げながら地域に新たな活力をもたらしてきた。

生徒を育て地域を動かしながら今後も新たな挑戦を続けていく。

大崎海星高校は、高校魅力化を通じて、人と地域を結び付ける拠点として、生徒を育て地域を動かしながら今後も新たな挑戦を続けていく。

2026年度からは、独自の探究学習に取り組む北海道大空高等学校(大空町立)、宮崎県立飯野高等学校との広域連携もスタートさせた。異なる風土や地域課題を持つ学校の生徒・教員が互いの地域について学ぶことで、より広い視野と新たな価値観を養う試みだ。

「これがゴールではありません」と兼田先生は力を込める。近年は少子化が加速し、全国募集を行う高校も増えてきた。選ばれ続けるには、取り組みを進化させる必要がある。そのために今後は島内の小中学校との連携を強め、大崎上島学の学びを体系化するとともに、さらなる深化を目指す。

## 地域に新たな活力を生む生徒たちの挑戦

生徒が主体となり魅力化を推進する動きも生まれた。広報活動を行う「みりよくゆうびん局」は、東京で開催された移住・定住フェアへの参加をきっかけに、「島の良さ、母校の魅力をもっとまわりたい」と感じた生徒たちによって2018年4月に結成された。現在は部活動として、中学生向けの学校見学ツアーや説明会の開催、他校との交流イベントの企画、SNSによる情報発信などを行っている。

生徒たちの活動や成長を支えるのが、島の大人たちの存在だ。先生だけでなく、コーディネーター、寮や塾のスタッフが、積極的に挑戦する生徒、

2015年度から生徒の全国募集を開始。かつて67人だった同校の生徒数は、2017年度は88人、翌年度は101人に増え、広島県が打ち出していた統廃合の検討基準の80人を上回ることに成功した。以降も生徒数は90人前後で推移し、基準を超える生徒数を維持している。

この取り組みで「地域そのものを学

びの場にできる」という実感を得た町と同校は地域探究学習、公営塾、教育寮という三つを柱とした魅力化プロジェクトを2015(平成27)年に開始させ、徐々に体制を整えていった。

魅力化プロジェクトの三本柱

プロジェクトの柱の一つである地域探究学習「大崎上島学」は、島全体を学びの場とする探究型の教育活動である。2016年度に本格始動して以来、進化を遂げてきた。

1年次の「羅針盤学」で自分や地域を知り、2年次の「潮目学」ではチームで課題解決の考え方を身に付け、3年次の「航界学」では個々がテーマを決めて探究に取り組む。3年間の学びを通して変化の激しい今の「世界」をたくましく生き抜く力をこの島で身に

付け「航界士」を目指すコンセプトだ。「生徒が積極的に動けるようフィールドワークなど実践型の学習を行っている」と話すのは、高校魅力化を担当する兼田侑也先生だ。例えば「平飼卵を地域に広めたい」と考えたチームは、養鶏農家や給食センターなどに出向いて話し合いを重ね、コストや衛生基準などの課題を乗り越えてこの卵の学校給食への提供を実現させた。また「先生のウェディングドレスをつくりたい」と考えたチームは、約1年かけてドレスを完成。さらに3年次の大崎上島学で福祉施設を訪れた際には、挙式していない老夫婦の話聞き、施設の方と相談しながら夫婦の結婚式を企画して開催したという。

「生徒の挑戦が、地域の人々の喜びへとつながっています」と先生は語る。

柱の二つ目、日々の学習サポートを行う公営塾「神峰学舎」は校内に設置された。地域おこし協力隊が講師を務め、キャリア教育「夢☆ラボ」も展開する。例えば、絵を描くことが好きな生徒は、この取り組みをきっかけに校内でアートイベントを開催。住民の協力を得て、作品の展示場所を島内の福祉施設やカフェへと広げた。さらに、同じ生徒がデザインした「ラッピングポスト」設置の際は、郵便局長も生徒と共に町長へ働きかけたという。

また、柱の三つ目である教育寮「コンパス」が2018(平成30)年に完成したことで、全国からの生徒をさらに受け入れやすくなった。同年から「地域みらい留学」にも参画、毎年10人前後が留学生として入学しており、全国から多様な背景を持つ若者が集まることも、生徒たちの視野を大きく広げることにつながり、好循環を生んでいる。

コンパスでは、親元を離れた生徒たちが寮生活を通じてさまざまな経験ができるよう地域との交流イベント等を開催している。また、入寮できなかった下宿生に対しては地域の方々が一般社団法人を立ち上げ、夕食の提供などをフォローする。

こうした魅力化プロジェクトと併せ



『島の仕事図鑑』は2015年の第1号発行以来継続して制作している。2022年には「キャリア教育推進連携表彰」(文部科学省・経済産業省主催)で最優秀賞を受賞した



1 地域探究学習「大崎上島学」では生徒たちが島民と会話して調べて考え、課題解決に挑む

2 公営塾「神峰学舎」では地域おこし協力隊が講師を務め、ゲストを招くなどしてキャリア教育「夢☆ラボ」も展開する

3 教育寮「コンパス」の前で体操をする生徒たち

# 地域資源を学びに変えて 地域と進める高校の魅力化

鳥取県立日野高等学校〈鳥取県日野町〉

少子化による生徒数減少で存続の危機に直面した鳥取県立日野高等学校。地域唯一の高校を守ろうと、学校や地域、行政が一体となって魅力向上に取り組んできた。日野郡3町（日南町・日野町・江府町）と連携し、地域資源を生かした実践的な学びを展開する同校の取り組みを紹介する。

文／倉恒弘美

## 学校・地域・行政で進めた 魅力向上への歩み

鳥取県南西部に位置し、岡山県と隣接する人口約2500人の山あいの町、日野郡日野町。その町にある鳥取県立日野高等学校は、2000（平成12）年に県立根雨高等学校と県立日野産業高等学校が統合して誕生した、創立25年を迎える学校だ。新設時、入学者数は160人を超えていたが、少子高齢化や米子市内の高校への進学志向の高まりを背景に、徐々に減少。2011（平成23）年には51人にまで落ち込み、地域から存続を危ぶむ声が上がった。

同校は日野郡で唯一の高校であり、地域における存在意義は大きい。通学のしやすさから地元で通う生徒も多く、統廃合されれば、生徒や保護者の負担増に加え、高校生と地域のつながりが薄れ、地域への愛着や活力の低下、人口流出の加速も懸念された。そこで同年10月、日野郡3町と学校・地域が連携し、日野高校の存続と、それを核とした地域づくりを目指して「日野高校の在り方を考える協議会」を設立した。同協議会は地域と連携した学習の充実や進路構想を打ち出すとともに、県知事や県教育長への要望書提出などの活動を展開した。2014（平成26）年の解散後は、「日野高校魅

力化支援連絡会」を経て、2018（平成30）年には具体的なカリキュラムの構築を担う「日野高校魅力向上推進協議会」へとその基盤が引き継がれ、現在の支援体制へと発展している。

## 進路に応じた学びと 地域で育む実践力

日野高校の特色の一つは、「みらい創造・地域創造」を基本理念に、普通科と専門学科を組み合わせた総合学科を設けていることだ。少人数教育で進学を目指す「総合進学系列」、草花・野菜の栽培や食品製造などを学ぶ「アグリライフ系列」、ビジネスの基礎やIT、観光産業などを学ぶ「情報ビジ

は地域で経験を重ねながら人間力を磨く。

「世代を超えた交流を通じてコミュニケーション力も育まれ、生徒たちは驚くほど成長します」と新田教頭は目を細める。

自ら課題を見つけ解決する「探究学習」も特徴的だ。2年次の「日野探究Ⅰ」では地域での聞き取りを通じて課題を見つけ、解決策を提案する。3年次の「日野探究Ⅱ」ではその実証に取り組む。昨年度は特産品開発として、地域の水の美しさを表現した「水まんじゅう」を考案。地域サポーターなどと協力し、日野を代表する土産品の完成を目指した。

## 学校と地域をつなぐ コーディネーターの存在

こうした地域との連携を支えるのが、2014年に設置された「日野高校魅力向上コーディネーター」だ。日

野町の会計年度任用職員として、先述の「日野高校魅力向上推進協議会」の実務者組織（ワーキンググループ）に所属し、郡内3町の行政、住民、企業と学校をつなぎ、活動の調整を担う。

「地域と学校の架け橋となり、教員だけではカバーできない部分を引き受けてくれる、頼れる存在です」と新田教頭は話す。コーディネーターの経歴は、元ラジオDJや卒業生などさまざまだ。地域の自然、文化、施設、人材を生かし、社会人講師の発掘や地元企業とのマッチングなどを通じて、学校づくりを支援している。

こうした地域ぐるみの教育環境や独自のカリキュラム、自然豊かな少人数教育に惹かれ、東京など都市部から単身で進学する生徒も珍しくない。2019年度から参画した「地域みらい留学」では毎年5人程度が入学し、寮生活を送る。餅つきや農業体験など、新しい



ラフティングやカヌーのほか、乗馬やゴルフなどアウトドア授業を行う科目「スポーツV」



- 1 「日野高ショップ」では、生徒がつくった農産物や加工品などを実際に販売して接客や商品管理などを実践する
- 2 地元福祉施設で行ったハンドマッサージ
- 3 日野学園の子どもたちとの農業交流
- 4 探究学習で試作を重ね、新たな日野名物「水まんじゅう」の開発に挑戦する生徒たち
- 5 鳥取県南西部地区の高校生が参加する「2025年度高校生フォーラムIN米子」でこの活動を発表し、中海テレビ賞を受賞



鳥取県立日野高等学校教頭の  
新田秀登先生

鳥取県立日野高等学校  
鳥取県日野郡日野町根雨310  
☎0859-72-0365  
https://www.torikyo.ed.jp/hino-h/  
Instagram @hino\_highschool

「人口最小県」鳥取の中でも規模は小さいですが、生徒にとって一番大きな成長ができる高校にしたい」と新田教頭は意欲をみせる。地域と共に歩む学校づくりは、これからも続いていく。

環境になじむための活動も盛んで、ここでもコーディネーターが活躍する。特色ある部活動も人気の理由だ。全国大会常連の射撃部や地元の「荒神神楽」を伝える郷土芸能部などで活躍する県外生も多い。

「学校の活動を通じて多くの人と関わる経験は、生徒の未来を切り拓く大きな財産になります。卒業後も何らかの形で日野郡に関わりたいという生徒は多くいます」と新田教頭は話す。

かつて高校進学は、偏差値などを軸に地元の学校から選ぶのが一般的だった。しかし近年は、地域みらい留学や広域通信制高校など進路の選択肢が広がっている。



リスクを背負いながら  
困難に挑んで得た成果が  
自社の存在感を圧倒的に高め  
勝ち筋へと導く

株式会社カスタム 代表取締役社長  
**戸田 拓夫**  
(広島県福山市)

profile

戸田 拓夫(とだ・たくお)  
1956年広島県福山市生まれ。1980年早稲田大学理工学部応用化学科中退後、父の経営するキングインベスト株式会社(現・株式会社キャストム)に入社。2007年キャストムグループ代表者・最高責任者に就任。折り紙ヒコーキ協会会長の顔を持ち、2009年および2010年、「折り紙ヒコーキ」の滞空時間のギネス記録を更新。関連書籍の執筆も多数。同社は、本社(広島県福山市)、フィリピン、タイ、コロンビア、ベトナムの各工場のほか、米国に試作、3Dスキャンのラボの拠点がある。従業員数はグループ全体で約1,500人、売上高はグループ83億円、単体72億円(2025年3月期)。

文／入江 太日利 写真撮影／西江 浩二

2023(令和5)年のG7広島サミットで各国首脳らに贈られた特別な折り鶴がある。平和記念公園(広島市中区)にある原爆の子の像のモデル・佐々木禎子さんが病床で折った紙の折り鶴を3Dスキャンし、ステンレスで原寸大に再現した「SADAKO」だ。縦0.7cm×横2.3cm×高さ1.3cm、重さはたったの1gという小さな折り鶴ながら、折り目やしわまで精密に表現されている。製造したのは、精密部品製造の株式会社キャストムだ。多品種・小ロットの複雑な金属部品製造を得意とし、鉄道、

航空、宇宙、医療機器など幅広い産業の精密部品を手掛ける。蠅(は)でつくった原型から casting を取り、金属を流し込む「ロストワックス法」と、金属粉末を樹脂と混ぜて射出成形する「MIM(金属粉末射出成形法)」を軸に事業を展開してきた。近年は、3Dプリンターでつくった樹脂模型を原型にしてロストワックス法と同様に金属製品を製作する「デジタルキャスト」も開発。さらに立体メタルキーホルダーなどエンタメグッズや宝飾分野でも注目されている。かつて従業員15人だった鋳物工場を、グループ全体で

1500人を抱える企業に成長させたのが、2代目社長の戸田拓夫氏だ。  
**クレーダー発生からの船出**  
同社は、拓夫氏の父・戸田昭三氏が製菓会社の製造部門を分離独立させ、1970(昭和45)年に設立した。ロストワックス法による精密鑄造を手掛け、新型溶解炉を増設し、金型棟を新設するなど、事業拡大に力を注いでいる最中、ある事態に見舞われた。  
拓夫氏が入社して2年目の1981(昭和56)年、社内派閥を形成していた

幹部らがクレーダーを起こし、金型や機械を持ち去るとともに集団退職したのだ。これにより従業員は27人から15人にまで減った。存続さえ危ぶまれる中、拓夫氏は残った社員との信頼関係の構築に努め、26歳の若さで経営の舵取りを決意。必要な機械を自作し、納期を厳守しながら、未開拓業種への営業に駆け回る多事多難の歩みが始まった。

会社が生き残るには、同業他社が敬遠するような難しい案件を請けるしかない。クレーダーの後、同社は試行錯誤と創意工夫を重ねて実績を積み、技術力を飛躍的に向上させていく。その結果、顧客の幅が広がって受注も増加し、1980年代後半には従業員120人を抱える規模にまで成長した。この時、戸田社長は「困難な道にはリスクを伴

うが、一定の成果を出すことで存在感を圧倒的に高め、勝ち筋を見いだすことができる」と経営戦略の方向性を定めた。

独自の技術で米国特許を取得

ロストワックス事業が軌道に乗っていた1987(昭和62)年、戸田社長は米国発祥の新しい金属加工法「MIM」の情報をつかむ。製法の置き換えが進めば仕事が激減するという危機感から自社開発を決意し、伝手を頼りMIMに詳しい研究者や技術者を訪ね歩いた。守秘義務の壁が立ち上がる中、「ヒントだけでも」と泥臭く食いついて対話を続け、得られた断片的な情報を基に試作を重ねた。再び訪ねてはヒントを拾うやりとりを繰り返し、1990(平成2)年

に自社独自のMIM技術を完成させ、翌年には米国特許も取得した。

しかし、特許取得という確かな実績があったにもかかわらず、米国メーカーの総代理店が特許権侵害の疑いを持ち出し顧客候補の企業を牽制したため、大手企業に営業に行っても門前払いされるようになった。ならば、と戸田社長は方針を転換し、全国の中小企業に焦点を定めた営業を始めた。

中小企業は少量生産のため、1台200万円もする金型には手が出ない。そこで、戸田社長は培ったノウハウを生かし、30万円で金型を提供することを提案した。この低価格・高品質の戦略が功を奏し、取引先は年間100社単位で増え、事業は成長軌道を描いていった。「技術革新に特別な近道はなく、思いつ



1 G7広島サミットで各国首脳らに贈られた折り鶴「SADAKO」。原爆の子の像のモデル・佐々木禎子さんが病床で折った紙の折り鶴を3Dスキャンし、ステンレスで原寸大に再現した  
2 複雑な三次元形状も得意とし、鉄系・ステンレス系・銅・アルミなど、さまざまな材質に対応したロストワックス法による精密鑄造  
3 溶解炉と焼成炉を備えた「キャストینگ」の現場。完成した鑄型に金属を流し込むと、白色だった鑄型が赤く輝く  
4 5 米国特許を取得したMIM技術で製作したマイクロツール。一つひとつの大きさが約25mmの工具セットで実際に使用もできる  
写真提供／2・4・5 株式会社キャストム

社員の夢をカタチにし  
新規事業に投資する

製造業の生産管理では、工場の生産現場の作業効率や安全性の確保を見直す「カイゼン活動」が不可欠とされる。同社でもカイゼン活動に日々努めていたが、度が過ぎて組織が硬直化し、「ゆとりをなくし、社員が明るく働ける雰囲気ではない」と戸田社長は感じ始めていた。そこで、2014(平成26)年から社員がやりたいことに挑戦できる環境を整えていった。

取り組みの一つが、「夢想発表会」だ。社員から「自分が社長だったらどんな事業をしたいか」などのアイデアを募り、全社員の投票で選ばれた上位3案の事業化に取り組むものだった。そこから誕生した新規事業部「アイアンファクトリー」は、自社の技術力を生かし、企画から試作・量産までを一貫して対応するOEM事業(商品開発)部門である。

「これまでにないモノづくり」をテーマに掲げ、本物のバナナをかたどった「バナナハンマーDX」、人気漫画キン肉マンのキャラクター「ロビンマスク」のステンレス製仮面など、斬新な商品を誕

生させた。他にもイチゴやトマトの生産、サステナブルなジュエリーブランド「KOH KOH」の展開や、1000万円を超える高級機械式腕時計づくりなど、事業の裾野を広げている。

「売れる商品は1割程度。失敗の方が多い」と戸田社長は語るが、自身が企画に口を出すことはなく、企画書も求めず、失敗をマイナス評価することもない。

「新規事業に数千万円規模の失敗や不良在庫はつきもの。損ばかり出る最初の3年間を経営者は耐え抜かなければならない」と説き、立ち上げの5年間は本業利益の5%を投資し、挑戦を可能にする明るい社風を築いてきた。新たな挑戦は技術やモチベーションを高めるだけでなく、マーケティング力にも磨きをかけ、現在では年間約400件もの自社商品を発売するまでになった。

### 魅力向上で新卒応募が増加 成長の機会も増やす

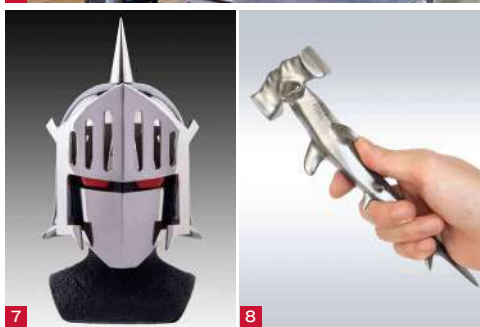
福利厚生も充実させており、託児所を完備したほか、使わなかった有休は99日まで積み立てることができ、長期療養や介護などへの充当も可能だ。さらに、「社員が昼食を楽しみにできるように」との思いから、社員食堂を刷新。ボリューム満点でおいしいランチを低価格で提供し、ステキやうなぎが登場する月1回の「チャレンジデー」も大好評だ。知名度と職場の魅力を上させた結果、新卒採用市場の競争が激しくなる中でも新卒の応募者数は大きく増加し、2023（令和5）年度には800人を超えた。

人材育成の面では、独自の「カチカチ山泥船方式」というユニークな教育法がある。のんびりした気質の社員に、あえ

て納期や品質基準の厳しい案件を任せろのだ。失敗しないよう先回りするのはなく、危機的状況に追い込まれた社員が底力を発揮して乗り越える過程を見守る。そうして成長の機会を与えて自信を培うことを狙いとしている。

### 誰もやりたがらない仕事を拾い 確実に仕上げていく

中国の金型メーカーが低価格とスピード量産を武器に世界シェアを拡大する昨今、日本メーカーを取り巻く環境は厳しさを増している。そうした状況においても、同社では今も月60〜70件の新規案件に取り組み、製品の品質を左右する「マザーツール」とも呼ばれる金型の数は、累計で3万5000個を超える。さらに、数多くの顧客を抱えることで、特定の企業や業種への依存を避けてお



6 近年は3Dプリンターを活用した新しい製造法「デジタルキャスト」に注力。工場にはさまざまな3Dプリンターが約30台並んでいる

7 8 新規事業部「アイアンファクトリー」の企画で誕生した「ロビンマスク」のステンレス製仮面とハンマーヘッドシャークハンマー

9 昼食が楽しみになるようにリニューアルされた社員食堂

10 11 戸田社長は1枚の紙を折るだけでつくる「折り紙ヒコーキ」の室内滞空時間のギネス世界記録を2009年に更新。2010年には29.2秒を記録し再度更新した。現在は折り紙ヒコーキ協会の会長も務める

写真提供／7・8・10・11 株式会社キャストム

り、各顧客の売上比率を1%以下に抑えて強固な経営基盤を構築している。

「ロットが小さかったり、不良率が高かったり、他社がやりたがらない仕事を拾って磨き上げていくことで、価格競争に巻き込まれにくい製品になる。自動化の進んだ大手や中国企業には手が出せない案件を、丁寧に手仕事で取り組み、確実に仕上げていく」と戸田社長は強調する。

また、苦境に陥る鋳物業者の救済にも目を向けている。自社の優秀な若手従業員を送り込んでサポートし、産業や技術の空洞化を防ぐ共生モデルを検討中だ。さらに、医療分野のニーズに応えるため、金属に比べて軽量で、耐熱性や耐薬品性に優れた高性能樹脂「ピーク材」部品の低コスト開発にも挑む。

「もう半歩先」を目指すキャストムの飽くなき挑戦と異端の経営哲学は、未来に向け、さらなる進化を続けている。



株式会社キャストム  
広島県福山市御幸町大字中津原  
1808番地1  
☎084-955-2221  
https://www.castem.co.jp/

writer  
入江 太日利（へりえたかとし）  
1970年福岡県生まれ。大学卒業後、業界新聞、経済誌などを経てフリーライターに。取材記事を幅広く執筆するとともに、写真撮影なども手掛けている。

## 二大看板商品に次ぐ挑戦を続け 故郷・山口の味をお菓子で伝える

### あさひ製菓株式会社 《山口県柳井市》

文／村上 郁子 写真撮影／宮本 剛

#### 商都・柳井に創業して109年 3代続く菓子の製造販売

山口県南東部・柳井市のあさひ製菓株式会社は「月でひろった卵」をはじめとする土産用菓子の製造販売で知られる。創業は1917（大正6）年。3代目となる現在の社長・坪野恒幸氏の祖父である坪野静守氏

が兄弟と共に柳井市千歳で「チトセ屋」としてスタートした。当時は最中<sup>なか</sup>の皮やあめ玉、煎餅などを製造するとともに、県内の菓子店の依頼を受けた商品製造も行っていたという。第二次世界大戦中、静守氏は中国・天津で日本軍向けの菓子の製造に従事し、終戦後、柳井に戻って家業を再開させた。しかし当時は、砂糖の



ドラマの放映に合わせて発売された「鳩子の海」

決まったのだ。翌年には山陽新幹線の全線開通も控え、「山口県のお土産菓子をつくらう」と考えた功氏は「鳩子の海」の商標を申請し、日持ちする土産用菓子の開発に取り組んだ。

脱酸素剤などがない時代に、菌を付着させずカビの生えない菓子を目指して試行錯誤した結果、まんじゅう生地をアルミホイルで包んでから焼く製法にたどり着いた。

「ホイル焼き製法は日本初でしたから、父は他の製造機を改造し、専用機をつくって焼き始めたのです」と



2001年に3代目社長に就任した坪野恒幸氏



「チトセ屋」を開業した当時の写真

#### 朝ドラ『鳩子の海』にちなんだ 土産用菓子が大ヒット

1966（昭和41）年に静守氏の長男・坪野功氏（現会長）が社長に就任した後、大きなチャンスが訪れた。1974（昭和49）年に柳井市<sup>かのき</sup>や上関町を舞台とする連続テレビ小説『鳩子の海』が放映されることが



1 ANAの機内用茶菓みに採用されてヒットした「月でひろった卵」  
2 「月でひろった卵」の製造風景。蒸した生地をボール状にして中にクリームを入れ、生地をふたをして再び蒸している  
写真提供／あさひ製菓株式会社  
3 柳井市の名物金魚ちょうちんが吊り下げられた「菓子乃季」総本店

坪野恒幸社長は話す。

そうして完成した「鳩子の海」は、たちまち大ヒット。JR各駅の売店を中心に飛ぶように売れ、仕入れ担当者が連日、工場前で焼き上がりを待っていたという。

誕生から半世紀余り、製法を進化させながらも、しつとりとした生地と程よい甘さのミルク餡<sup>あん</sup>を守り継ぐ「鳩子の海」は、同社最古の看板商品として、今も人気を誇っている。

### 「月でひろった卵」が機内用茶菓みに採用

「鳩子の海」のヒットを機に自社製品の製造・販売に専念した同社は、1975（昭和50）年に初の直営店

「鳩子庵」を開設し、柳井市新庄に500坪の新工場を建設した。大量受注が可能となり、1981（昭和56）年にはANAの機内用茶菓みにあさひ製菓の商品が選ばれた。県内産菓子では初の快挙だった。

その後も毎年ANAから新製品の提案が求められ、1986（昭和61）年に採用されたのが「月でひろった卵」だった。この商品はもともと、かつて製造していた山口銘菓・外郎<sup>うしろ</sup>の生産ラインを遊ばせず活用させるために考案した菓子だった。ふわふわのスポンジの食感とたっぷり入ったカスタードクリームの組み合わせは当時、他に類をみない菓子と評価され採用が即決された。機内限定で

振る舞われる茶菓みに採用されると問い合わせが殺到し、一般販売開始後は大反響を呼んだ。「月でひろった卵」の唯一無二の味も、独自の製法から生まれていた。

「蒸した生地をボール状にして中にクリームを入れ、生地をふたをして再び蒸すので、ふわっとした口当たりと、クリームがみっちり詰まった仕上がりになるのです」

恒幸社長の言葉からは、いずれも新製法によって二度も大ヒット商品を生み出してきた誇りが伝わってくる。ユニークな商品名は、客室乗務員の意見を取り入れて決めたという。今や山口県の定番土産とも言われる「月でひろった卵」は、同社のチャレ

いまや150種2万株を誇り、品種、株数共に県内最大級となっている。毎年6月にはあじさい祭を開催しており、2026（令和8）年には3万5000人が来場した。取材当日はあいにくの雨だったが、あじさい園には、一人傘をさし、花の様子を確認する94歳の功会長の姿があった。

### 時代のニーズにも応え、リニューアルや挑戦を続ける

2002（平成14）年、恒幸社長は洋菓子専門店のシユシユ柳井店をオープンさせた。カフェとガーデン、ライブラリーを備え、雑貨販売も行うシユシユは、ゆったりと時間を過

ごせる優雅な雰囲気のお店だ。

「お客さまからは『山口県にこんな店があるなんて』と喜ばれ、山口、宇部にも出店してシユシユは全3店舗になりました」

2009（平成21）年に誕生した焼きたてベーカリー「シユクルヴァン」は、現在7店舗にまで増加。牛肉がたっぷり入った自家製カレーを詰めたカレーパンが評判だ。

ネット販売にもいち早く参入し、自社販売サイトのほか、大手ECサイトでも商品を展開してきた。発売開始から25年で累計60万個以上を売り上げた「魅惑のザッハトルテ」の口コミ数は9000件を超えており、



4 150種2万株と県内最大規模となったあじさい園  
5 地下水「琴名水」の給水場を設け、地域に開放  
6 ネットで人気の商品「魅惑のザッハトルテ」は、アレルギー対応の卵なし商品も発売した  
7 社内に設けられたキッズスペース  
写真提供／6・7 あさひ製菓株式会社

### 地元住民に愛される故郷の味を目指す

現在の店舗数は48軒で、ネット上を除き、全て山口県内で展開する。県内出店にこだわるのは「まず地元の方々に愛される菓子づくり、故郷の味として広めていきたい」という信念からだ。故郷の味として親しみを持ってもらうため、毎年、「月でひろった卵」の記念日として定めた7月14日には柳井市の全小学生を対象に、また、成人の日には県内全ての式典参加者を対象に、同商品を無料配布している。

雇用面では、従業員の8割を占め

ンジ精神と開発力、柔軟な発想が生み出した看板商品である。

### 給水場開放やあじさい祭で地域に開いた会社

「月でひろった卵」を発売した1987（昭和62）年には、新店舗ブランド「菓子乃季」1号店を工場近くに出店。「菓子の起源・果物と季節感への尊重を込めて命名し、製品には果物か木の実を入れることにしました。『月でひろった卵』のクリームにも国産栗の粒が入っています」と恒幸社長は語る。以後、県内各地に「菓子乃季」の出店を進め、現在では34店舗を数える。

1992（平成4）年には、手狭になった工場を柳井市馬皿<sup>ばさ</sup>へ移転、2000坪の新工場を建設し、本社工場とした。

1万坪の敷地には、名水の条件を満たす地下水が豊かに湧き上がっている。「琴名水」と名付けて「月でひろった卵」の蒸し器に入れる水として使うとともに、給水場を設け、誰にでも無料で提供している。

また、敷地内の裏山にあるあじさい園は、約25年前から功会長が少しずつあじさいを植樹し始めたもので

る女性が働きやすいよう、時短勤務者でも正社員と同等の役職に就ける制度を設けるほか、社内にキッズスペースを整備するなど、制度や環境の整備に努めてきた。

「鳩子の海」や「月でひろった卵」などのロングセラー商品を抱えながらも、商品開発に力を入れ続け、今や商品数は400種を超える。

「リニューアルが好きな当社は常に開発と品質管理に注力してきました。何より、お菓子は文化であり心の栄養でもあります。これからも地元で愛される、山口を代表するおいしいお菓子をつくり続けていきます」と恒幸社長。来年2027年の創業110年を前に、揺るぎない決意を示してくれた。

Writer

村上 郁子（むらかみいくこ）  
山口県生まれ。フリーライター。大学卒業後、大学研究室勤務を経て、各種雑誌や自治体・企業の広報・情報誌、記念出版物などの取材・執筆・編集に携わる。



あさひ製菓株式会社  
山口県柳井市柳井5275  
☎0820-22-0757  
https://www.kasinoki.co.jp/

# 女子野球チームで挑む まちおこしと日本一

島根フィルティーズ 球団代表

大久保 一則 《島根県川本町》

野球一筋で育った島根県川本町出身の大久保一則さん。人口減少と少子高齢化に歯止めをかけるべく、社会人女子野球チーム設立プロジェクトの先頭に立ち、現在は球団代表としてチームを牽引する。その情熱がまちに新たな風を吹き込んでいる。

文／山根 み佳  
写真撮影／佐野 明美

## profile

大久保 一則  
〈おおくぼ・かずのり〉

島根県川本町出身。1986年生まれ。地元の高校を卒業後、島根県立大学に進学し総合政策学部で学ぶ。大阪市に本社のある大手建設会社に入社し、全国転勤を経て2016年にUターン。川本町観光協会に入り、町のPRをはじめJR三江線廃線後の活用や温泉の指定管理などに携わる。2024年に一般社団法人かわもと暮らしが運営する島根フィルティーズの球団代表に就任。



## 都会に憧れた野球少年が Uターンして地元をPR

「小学校から大学まで野球を続け、ずっと野球一筋でした」と、人懐っこい笑顔で語る大久保一則さん。きりりとした眉に爽やかな目元は、野球少年がそのまま大人になったような快活な印象を与える。

大久保さんが生まれ育った島根県中央部の川本町は、人口約2900人（2026年5月現在）の山あいの町で、合鴨の養殖や荏胡麻<sup>えごま</sup>の栽培が盛んなことで知られる。高齢化率は45％に達し、大久保さんが生まれた1980年代半ばに約6300人だった人口は、40年で半分以下になった。

「僕が育った家庭は9人家族で、とてもにぎやかでした。地元で大学まで進学しましたが、当時は都会への憧れが強く、スーツを着て駅を颯爽<sup>さつそう</sup>と歩くサラリーマンになりたいと思っていました」

卒業後、大阪に本社を置く大手建設会社に就職した大久保さんは、大阪、東京、千葉、埼玉で都会生活を送り、仕事もプライベートも充実していた。しかしその頃、故郷では祖父母らが他界して妹たちも独立、気がつけば両親だけが実家で暮らすようになってい

た。代々続く家が自分の代で途絶えることに対し申し訳ない思いもあり、帰省するたびに、他界した祖父や祖母の「戻って来い」という声が聞こえてくるような気がした。

背中を押したのは、地元の役場で働く高校野球部のOBだった。就職後も定期的に電話で「帰って来ないか」と声をかけ続けてくれていたという。5年で会社を退職し、2016（平成28）年に川本町にUターンした大久保さんは、その先輩の勧めで川本町観光協会に入ることを決めた。

「ちょうどJR三江線<sup>さんこうせん</sup>が廃線を間近に控え、大勢の観光客が押し寄せていたタイミングだったんです。廃線後も、線路を活用したレールバイクの導入やイベントの開催に奔走していました」

また、川本町には湯谷温泉<sup>ゆだ</sup>という秘湯がある。観光協会では2019（令和元）年から2年間、管理・運営を請け負うこととなり、大久保さんは企画・営業を担当した。まずは町民に来てもらおうと、ビアガーデンやカラオケ大会などのイベントを積極的に企画し、多い月には20日開催したこともあった。大久保さんが抱いていた「帰郷したら町のPRにつながる仕事がない」という漠然とした思いは少しずつ形になっていった。

## 故郷から託された使命 女子野球の球団設立へ

2019年、川本町にある県立島根中央高等学校（2007年度に旧県立川本高等学校が旧県立邑智<sup>おおち</sup>高等学校と統合して開校）に山陰初となる女子硬式野球部が創設された。その背景には、生徒数の減少、とりわけ女子生徒の少なさを解消する狙いがあった。同校は「地域みらい留学」への参加を通じて、山陰だけでなく全国から部員が集まるようになっていたが、卒業後の受け皿がなくて、せっかく野球を目的に集まった女子生徒も町を離れてしまう。そこで町は、定住・交流人口の増加を目指す「女子野球でつながるプロジェクト」を発足させ、総務省の「地域おこし協力隊」制度を活用した社会人女子野球チームの設立を決定した。2024（令和6）年、その球団代表として白羽の矢が立ったのが大久保さんだった。

「生まれ育った町の活性化に野球で挑戦できるなんて、これほどありがたいことはない」と、大久保さんのチャレンジが始まった。

まず着手したのは監督探しだ。候補に挙がったのは、島根県大田市出身の森山一人<sup>かずと</sup>氏だった。県立邇摩<sup>にま</sup>高等学校から1991（平成3）年にドラフト

6位指名で近鉄バファローズに入団、その後福岡ダイエーホークスでも活躍した元プロ野球選手だ。引退後は独立リーグの四国アイランドリーグで創設期から11年にわたり指導者を務めたほか、大学野球部での指導や野球スクールの運営など、豊富な指導経験を持つ。「この人しかいないと思いました」と大久保さんは振り返る。オフアーを受けた森山氏はすぐに快諾。居住地の広島県福山市から川本町まで通い、木曜から日曜まで滞在して指導に当たることになった。



1 高校時代の大久保さん  
2 観光協会で大久保さんが担当した廃線アクティビティ「レールバイク」（工事のため現在はお休み中）  
3 設立時の島根フィルティーズ。最後列左側が森山一人監督

写真提供／島根フィルティーズ運営事務局



梅津酒造有限会社  
鳥取県東伯郡北栄町大谷1350  
☎0858-37-2008  
https://umetsu-sake.jp/  
料理協力：味処 進  
鳥取県倉吉市上井町2-7-1



## 生酛仕込 富玲

《鳥取県北栄町》

長芋のくず豆腐揚げ

日本海に面し、スイカや長芋の産地として知られる鳥取県北栄町。江戸時代に陸路と海路の要衝として栄えたこの地で、梅津酒造は1865（慶応元）年に創業した。以来、秀峰・大山の伏流水を仕込み水とし、6代にわたり酒造りを行う。蔵元の梅津家には、先進性と挑戦を恐れない気風が息づく。明治から昭和初期にかけて蔵の礎を築いた2代目は、息子である3代目を10代の頃にアメリカへ留学させた。現地ではテニスでも活躍し、邦人大会で優勝する腕前を誇った。この時、現地のテニス大会で耳にした応援の掛け声「Hurrah!」が強く印象に残り、後に代表銘柄となる酒を「富玲」と名付けた。「頑張れ」「万歳」を意味する、縁起の良い酒名だ。

4代目は鳥取大学工学部で発酵工学の教授を務めながら蔵を支えた。長芋農家の相談をきっかけに蒸留器を導入して開発した「砂丘長いも焼酎」は、今や鳥取県を代表する土産品として親しまれている。

地域の恵みを酒に生かす姿勢は、その後も受け継がれた。5代目は湯梨浜町特産の野花梅を使った日本酒仕込みの梅酒「野花」を開発し、また、地元住民と共に米づくりから仕込みまで行



4 選手たちは川本町の地域おこし協力隊として就労型研修や地域行事の企画や補助も行う  
5 大阪で開催された近畿鳥根県人会でのPR活動



7 川本町民球場でフィルティーズを応援する住民たち  
8 2026年シーズン、2部に昇格したルビーリーグは4月に開幕し、5月には愛媛県松山市で開催された子規記念杯で優勝を果たした

写真提供／鳥根フィルティーズ運営事務局

## 地域おこし協力隊も務める「鳥根フィルティーズ」が始動

チーム名は公募で「鳥根フィルティーズ」と決定。さらにチーム始動の半年前、川本町は一般社団法人全日本女子

「地元である鳥根のチームということ、とてもうれしかったです。女子野球にも関心があったので、どんな形でも携わりたいと思いました」と森山監督は話す。勝てるチームづくりと同時に、地域貢献活動ができる選手を集めるべく、鹿児島県、熊本県、愛媛県など各地の高校を中心に駆け巡った。

同時に、大久保さんはスポンサー集めにも力を注いだ。まだ見ぬ女子野球チームへの理解と応援をお願いするため、設立の思いを手紙に綴り、町内企業に呼びかけたという。その結果、28社のスポンサーが集まった。

野球連盟から女子野球の普及と地域活性化を目指す「女子野球タウン」認定を受けた。こうして2025（令和7）年4月、川本町に女子硬式野球クラブチームが誕生し、女子野球と地域活性化の両輪が回り始めた。

チームの運営母体は、「一般社団法人かわもと暮らし」である。観光協会と統合し、移住・定住支援をはじめ、地域資源の活用や地域住民・行政・企業との連携を通じて、持続可能で魅力あるまちづくりを推進している。フィルティーズ1期生は13人で、うち1人は県内の看護学校に通う。半日は練習に励み、残る半日は地域おこし協力隊の業務に就いて、町やチームの情報発信ふるさと納税のPR、特産品やグッズの商品開発、地域とのコラボレーションやイベント業務などに当たっている。

「1年が経ち、地域のにぎわいにつながっていることを実感しています。スポンサーや地域の人たちのおかげで野球ができていますのだとメンバー全員が

育所などでの就労型研修で社会経験を積みました。活動を続けるうちにチームの認知度も高まり、次第に地元の人たちが試合に足を運んで応援してくれるようになりました」と大久保さん。

## 1部昇格を目指しつつ地域のにぎわい創出へ

2026（令和8）年春に2期生となる5人を迎え、現在18歳から28歳のメンバー18人がグラウンドで汗を流している。スポンサーは町外含め43社に増えた。3000人に満たない町に、高校の女子野球部約40人とフィルティーズを合わせ、現在約60人の野球女子が住んでいることになる。

真に理解すること。それが継続していく大切な鍵です」と、気を引き締める。野球の技術だけでなく「人」を育てることも目指す。

森山監督は、「1、2期生をベースに10年、20年と続いていくチームづくりをしていきたい。町がバックアップしてくれる環境をフルに生かしながら野球と向き合い、満足して卒業してもらえれば」と、いつか巣立つメンバーの将来を見据える。

中国女子硬式野球連盟のルビーリーグ3部から参戦した鳥根フィルティーズは順調に2部に昇格、今季は1部昇格を目指して戦っている。いつか日本一となったチームが町を元気にすることを夢みながら、そして彼女たちが鳥根フィルティーズに入って良かったと心から思えるよう、大久保代表の挑戦はこれからも続く。

Writer

山根 み佳（やまね みか）

1963年鳥根県生まれ。フリーライター。淑徳短期大学社会福祉学科卒業。山陰の情報誌や地元鳥根の公益財団法人HPPのコラムなどで執筆している。編著に、松江を代表する職人たち取材した「松江の六人衆」全井出版がある。

※ チーム名「鳥根フィルティーズ」の由来  
鳥根県だけに自生し川本町が有数の群生地であるイズモコバイモの学名「フリティラリア」と、音楽の町・川本町をイメージしてオーケストラ名などに使われるギリシャ語「Phil（愛する）」を組み合わせた造語

鳥根フィルティーズ運営事務局  
鳥根県邑智郡川本町川下1490-1  
https://www.philtiys.com/

# 隠岐の田楽と庭の舞

隠岐諸島の西ノ島町に息づく舞楽、美田地区の「田楽」と浦郷地区の「庭の舞」。それぞれの地域で連綿と受け継がれてきた二つの伝統芸能は、今なお島民の暮らしの中に生き続けている。

(島根県西ノ島町)

## 島に伝わる二つの十方拝礼

島根県の日本海沖に浮かぶ隠岐諸島には、大陸から伝わった文化や本土の芸能が古式のまま受け継がれた民俗芸能が数多く残る。島前の西ノ島に伝わる「隠岐の田楽と庭の舞」はその一つで、五穀豊穡を祈る祭礼で奉納される舞楽だ。

同じ西ノ島町内の美田地区の美田八幡宮では西暦の奇数年に「田楽」が、浦郷地区の日吉神社では偶数年に「庭の舞」が9月の祭礼で奉納される。

この二つは「隠岐の田楽と庭の舞」として、1992(平成4)年に国の重要無形民俗文化財に同時指定された。交互に行われるため一対のようにもみえるがそれぞれ独立した伝統芸能で、地元ではいずれも「十方拝礼」と呼ぶ。

「美田八幡宮の十方拝礼と日吉神社の十方拝礼は、連携も対抗もしていません。いつからか、どちらも隔年開催で、それが

て拝殿裏へ向かい、頭の御幣を交換して戻ってくるというもので実際には相撲は取らない。これを三度繰り返す。

最後の「田楽踊」は、僧衣姿に大きな四角い笠をかぶった二人がびんざさら(柏板を束にしたもの)を使用して舞う「中門口」で始まる。次の「鶏の舞」では鶏冠をかぶった二人が小鼓を打ちながら四方に向きを変えて踊る。この時に囃子方が歌う「たのしやしゅうはいらあ」という歌詞から、「十方拝礼」と呼ぶようになったと考えられる。続く「子ざさら」では赤い笠と赤い衣装の少年二人が摺りざさらを手に踊る。最後に全員の「総踊」で終わる。

一方、日吉神社の「庭の舞」は、これに庭の舞という演目が追加されたもので内容は似ている。庭の舞は舞楽の「東遊」に起源を持つ、白い衣装の6人舞である。前日の「笠揃え」では衣装を着けて本番同様の予行演習を、美田八幡宮の「田楽」は長福寺で、日吉神社の「庭の舞」は宮司の自宅庭でそれぞれ行う。

## 次世代へつなぐ継承の知恵

国の重要無形民俗文化財指定という大きな価値が加わり、意識が少しずつ変化していると松浦さんは話す。

「かつて、十方拝礼に参加できることは格式ある家の誇りと考える人が多くいました。しかし時代とともにその感覚は薄

たまたま交互に行われてきたんです」と、

一般社団法人西ノ島町観光協会会長の松浦道仁さんは話す。松浦さんは美田八幡宮をはじめ島内10社の宮司を務めている。

美田八幡宮に残る『八幡宮祭礼式書』(1813年)や棟札の記載から、美田地区の十方拝礼は室町時代末期にはすでに行われていたことが分かる。また、江戸時代ごろまでは代官所が祭礼を執り行い、地区の庄屋たちが協力したとされ、島の大がかりな公式行事だったと考えられる。

## 神前に奉納する伝統の舞

美田八幡宮では祭礼が近づく、地域住民の手で拝殿正面に舞台が組まれる。その舞台上で奉納される「田楽」は、「獅子舞」「神の相撲」「田楽踊」の3部構成だ。獅子舞の次に行われる「神の相撲」は、紅白のふんどしに鉢巻き姿の少年二人が麻袋一反を掛けた幣串を持って舞台上で向き合う。行司役の掛け声で舞台を降り

れ、『後世に残さなければならぬ』という義務感に変わりつつあると思います。伝統を未来へつなぐには時代に合わせた工夫も必要です」

日吉神社では、40年以上前、地元小学校の校長であった当時の宮司が、後継者不足を見据えて主に小中学生を舞い手とし、学校で継承に取り組み仕組みに変えたという。一方、美田八幡宮では、今も子どもが担うのは「神の相撲」と「子ざさら」のみだ。舞い手で組織する「保持者会」とは別に「保存会」が存在する。保存会は美田尻地区の7集落の自治会長や宮司、総代会長、保持者会の代表者らで構成され、衣装の修繕をはじめ資金面・人材面で支える。そのため保持者会は後継者への指導に専念できるのだ。

また、いずれの十方拝礼も子どもたちが参加しやすいよう、かつては9月15日で固定されていた祭礼日を、前後の週末の日程に変えている。

古式を守りながらも時代に合わせて姿を変え、十方拝礼はこの島で次の世代へ受け継がれていく。



一般社団法人西ノ島町観光協会会長の松浦道仁さん

一般社団法人西ノ島町観光協会  
[連絡先]  
島根県隠岐郡西ノ島町大字美田  
4386-3  
☎08514-7-8888



浦郷地区・日吉神社の十方拝礼のみで行われる演目「庭の舞」



1



4



3



2



6



5

- 1 日吉神社拝殿で奉納される十方拝礼では、舞い手も囃子方も主に小中学生の子どもたちが担当する
- 2 日吉神社の「神の相撲」は拝殿から外に出て、拝殿裏で出会ってから戻ってくる
- 3 美田八幡宮の「神の相撲」。日吉神社の十方拝礼とは同じ演目でも少しずつ道具や衣装の様子は異なる
- 4 鶏冠をかぶり小鼓を打ち鳴らす「鶏の舞」
- 5 「田楽踊」の最後の演目「総踊」。手前は僧衣姿でびんざさらを持って踊る「中門口」の舞い手
- 6 赤い衣装の少年二人が摺りざさらを手に踊る「子ざさら」

棚田の里に眠る  
東洋一の鉱山遺産

岡山県の中央部に位置する山あいのまち・久米郡美咲町は、美しい棚田の風景に囲まれ、「たまごかけご飯の聖地」としても知られる。この美咲町の東部、吉井川中流域にある柵原鉱山は、かつて東洋一の硫化鉄鉱（黄鉄鉱）を産出する鉱山として栄えていた。

柵原で鉱石が発見されたのは江戸時代の初めで、大正期に採掘が本格化する。最盛期は戦後の昭和30年代であった。この時期には三交代制で昼夜を問わず採掘が続けられ、年間90万トン以上の鉱石を産出していた。ここで採れるのは硫化鉄鉱で、硫黄52%、鉄45%が含まれる。硫黄から硫酸が生成され、そこから硫酸という肥料の原料がつくられ主に米づくりに利用されたほか、化学繊維の製造にも必要とされた。柵原の硫化鉄鉱は戦後の食糧増産と経済成長を支え続けたのである。

しかしその後、石油から硫酸を取り出す方法が開発されたことや、海外から安価な硫化鉄鉱が輸入されるようになったことから、柵原の鉱石需要は減少した。その結果、1991（平成3）年3月に75年の歴史に幕を下ろした。現在は柵原鉱山資料館および柵原ふれあい鉱山公園として親しまれている。

オンリーワンのご当地ミュージアム 9  
柵原ふれあい鉱山公園  
柵原鉱山資料館

東洋一の硫化鉄鉱山で  
戦後日本を支えた歴史を体感



大正時代から昭和時代にかけて最盛期を迎えた柵原鉱山に関する資料を展示

レトロな駅舎や車両保存で  
映画の人気ロケ地に

資料館では、柵原鉱山で採掘される鉱石はもちろん、世界各地の鉱石が販売されており、鉱石マニア垂涎の品ぞろえとなっている。硫化鉄鉱は酸化による表面の経年変化を観察するという楽しみ方もある。

また、旧片上鉄道の吉ヶ原駅舎と操車場があった一帯は、資料館を囲んで公園となっており、駅舎と車両・線路が保存（一部復元）されている。片上鉄道は、江戸時代の高瀬舟に代わる鉱石輸送手段として設けられた鉄道だ。柵原鉱山閉山の年まで硫化鉄鉱を県南の片上港（備前市）まで運び続け、住

「いま皆さんが立っている床の下には穴が無数に開いていて、鉱山の坑道が縦横無尽に広がっています。この坑道の総延長は約1400kmです。これは、日本列島を縦断するのと同様同じ距離です。最深部は1050mで、気温は大体41℃42度、湿度は100%という過酷な環境下で、かつて鉱石が掘られていました」

そう話すのは、資料館で長年ガイドを務めている畝本一さんだ。資料館へ入ると、鉱山町のレトロな街並みが広がる。まるで戦後の昭和にタイムスリップしたかのようだ。

エレベーターで地下へ  
採掘現場をリアルに体感

地下へのエレベーターも臨場感たっぷりだ。乗ると、ガコンガコンと揺れる効果音までつけられていて、坑内作業員になって地下深くまで降下していくような気分が味わえる。エレベ

民の足としても利用された。現在、沿線は「片上ロマン街道」の名で親しまれ、サイクリングロードとなっている。駅舎内には石造りの改札や、駅長室、待合室がそのまま残されており、ホームや公園内の線路にはディーゼル機関車など貴重な車両が並ぶ。動態保存車両もあり、コロナ禍以前は月に一度の乗車体験も行っていたという。

柵原鉱山は閉山後もさまざまな遺構が良好な状態で保存され、これまで『松本清張ドラマスペシャル 砂の器』（テレビ朝日、2011年放送）や、映画『とんび』（瀬々敬久監督、2022年公開）など、数々の映画やドラマのロケ地となってきた。さまざまな形で柵原鉱山の歴史を後世に伝える、貴重な拠点である。



再現された坑道内での作業の様子



当時の商店街や鉱山社宅での暮らしぶりを再現した空間が広がる



柵原鉱山で採掘された硫化鉄鉱をはじめ、さまざまな鉱石が販売されている



硫化鉄鉱は化学工業に欠かせない硫酸の原料であった

資料館のある柵原ふれあい公園には、廃線となった片上鉄道の線路や駅舎、鉄道車両と共に坑内用の電気機関車や高瀬舟のレプリカなども保存されている

ガイド 畝本一さん  
父親が柵原鉱山で働いていたという畝本さん。自身の経験も交えながら鉱山の歴史を伝える。  
\*ガイド希望者は要事前相談



10

柵原ふれあい鉱山公園  
柵原鉱山資料館  
岡山県久米郡美咲町吉ヶ原394-2  
☎0868-62-7155  
https://yanahara-fkk.com/



11



鉱山内で採掘した鉱石を運搬した坑内電車

# 鷲峰山

じゅうぼうやま

《鳥取県》



山頂からは日本海と湖山池が一望でき、鳥取空港や鳥取砂丘も確認できる



2 岩肌に掛けられた急勾配の階段

3 鷲峰神社の狛犬は、幕末に活躍した青谷の石工・川六の傑作だ

4 鷲が翼を広げたような美しい山容

写真提供 / 1・4 小鷲河地区住民  
2・3 鳥取市



地図製作：磯部 祥行

鳥取市鹿野町、西因幡県立自然公園内にある標高920・4mの鷲峰山。江戸時代に編纂された『因幡誌』には、八千弋神（大己貴命）が大鷲に乗りこの山に降り立った話のほか、大山と背比べで勝ったものの、怒った大山に頭をすくわれ低くなったという伝承も残っている。

古仙谷バス停近くの登山口から古仙谷コースを登る。中国自然歩道として整備された登山道には、長い丸太階段がたびたび現れる。しばらく進むと尾根筋に出る。尾根道は西側の眺望が開けており、展望所では山々の向こうに大山も見える。

ヒノキ林からブナ林に変わり、登りきると山頂だ。山頂広場には休憩所が設けられている。その上の展望台に上がると日本海が眼前に広がり、湖山池の奥に鳥取空港、その隣には鳥取砂丘も望める。帰路は今春復旧した鷲峰コースで下り

る。急勾配で岩場も多く、足元には注意が必要だ。小さな滝の横の階段をそろそろと下りてさらに進むと、鷲峰神社に着する。鷲峰登山口のある神社周辺は地域住民が植栽した5000本のモミジで彩られ、秋はブナ林の紅葉とともにこの山を代表する見どころとなっている。

一日も。百年も。



中国電力



中国電力ネットワーク



若い風ホームページ

©「若い風」VOL.116 2026年9月1日発行

発行人：福谷 伸爾 編集人：城市 奈那

●企画：中国電力株式会社 地域共創部門 地域共創部  
中国電力ネットワーク株式会社 総務部

●発行：中国電力株式会社 地域共創部門 地域共創部  
〒730-8701 広島市中区小町4-33 ☎082(544)2759

●編集・制作：株式会社ジェイクリエイト  
〒101-0052 千代田区神田小川町3-7-13 ヴァンサンクビル6F ☎03(6273)7135